
青夏

玉子あれるぎい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青夏

【Nコード】

N9547M

【作者名】

玉子あれるぎい

【あらすじ】

主人公：海辺夏実と幼馴染の伊藤ななきとその友達、希尾田俊の小さな想いから始まる。

中学生が描く淡い夏の恋。まだ何も知らない中学生が大人になっていくストーリー！

小さな想い

「きゃあ〜っ？ “希尾田”くーん」

「紅ちゃん、声大きいよお」

「これくらい声出さないと、聞こえないでしょう。ほら、夏実も声出して」

今何をしているかと言うと、友達の秋本紅花ちゃんに誘われて、バスケ部のエース希尾田俊くんを見物中。まあ、私はそちに興味は無く、幼馴染の伊藤ななきくんが居るから付き合ってるわけであつて、希尾田くんには、一切興味は無い。が、しかしこれがまた希尾田くんはモテテまして、

体育館に人がたくさん集まるのです。だから、昼休みとか早い時間に場所とつかないと、見えないから困る、私だつて、ななきくん見たいのよ。つて言ってもみんな、希尾田くん目当てだけだね。

「ありがとうございます！」

と、いつの間にか練習は終わっていますが、このあとが嫌なのよね。

「希尾田くーん？」

「カッコ良かったよ〜」

「ねえ、一緒に帰ってくれる？」

という風に、希尾田くんの周りにたくさんの子が集まっております。希尾田くんも困るつて、つて思う。まあ、その中に紅ちゃんも居るけどね。で、私は、ななきくんの所へ行く。

「お疲れ様」

「あ、夏実も来てたの？」

「うん、紅ちゃんと一緒に」

「……そっか……」

そう、私はななきくんが好きだけど、ななきくんは紅ちゃんが好き。そうは言っても、諦められるわけないに決まってる。

「あ、海辺だ。来てたんだ」

「え、うん」

やっと解放されたっぽい。エースは御苦労さんだね。余計汗かいてるし。

「エースは御苦労さんだな」

「おい、やめろよそういうの。困ってるんだからさ」

ななきくんが私と同じ事……。何か照れる。やばい、顔赤いかも。

「夏実いゝ？ あ、居た。もう、何やってんの？」

「あ、ゴメン紅ちゃん」

「全く、……えっ、希尾田くんじゃない！ 夏実友達なの？」

「うん、まあ……一応……」

やつぱ来た！ 喰いついてくるわね、絶対！

「何で言ってくんないのよ！ っていうか、何で友達？」

「ん？ ああ、それなら俺の家に俊が遊びに来た時、超度、夏実も居たんだよ」

「そうなの？」

「うん……まあ」

「ふーん」

と、紅ちゃんが笑いながら、私を見てきた。その笑いは、ちょっと怪しかった。何だろう？

そして、紅ちゃんと一緒に帰って行った。話しながら帰って行って、あつという間に、別れる時が来た。

「んじゃ、また明日ね！」

「うん、バイバイ！」

手を振ってから、また歩き出す。そして、急に誰かが私を呼んだ。

「海辺！」

振り返ると、走りながら希尾田くんがこっちに向かって来た。

「よっ！」

「どうしたの？」

「いや、見かけたから、途中まで一緒に帰ろうと思って……」

「そっか、じゃあ帰ろ」

「うん」

そういえば、希尾田くんも同じ方向だったんだっけ。それにしても何を話せばよいのやら……。

「あのさ、海辺は好きな人とかいる？」

「え？ いるけど……」

急に聞いてくるから、ビックリしちゃった。希尾田くんのタイプとか、聞いたことあるなあ、確か背が高くて、大人っぽい人だったよ
うな。

そして、会話も止まり、別れる時が来た時。

「じゃあ、バイバイ」

「……うん……」

手を振って、また歩き出そうとした時、呼びとめられたのだ。それは、もちろん希尾田くんだ。

「海辺、待って！」

「ん？ 何？ 希尾田くん」

希尾田くんは下を向きながら、恥ずかしそうにしていた。

「その……」

~~~~~

「あ、電話。ちょっとゴメン」

ポケットから携帯を取り出して、電話に出た。

「え、ちょ……」

「もしもし？ ……うん。先食べてていいよ、もうすぐ帰るから……」

「うん。じゃっ」

電話を切って、携帯をポケットにしまって、視線を希尾田くんに戻した。

「ゴメン、それで何？」

「え？ あ、えっと……俺……海辺の事が、す……す、きなんだ……」

希尾田くんは、顔を真っ赤に染めてながら言った。そして、顔を下に向ける。

……あれ！？ 私に今、希尾田くんがコ……告白したような気のせ  
いかな？ そうよ気のせいよ！ うん！ だって……。

「じゃあ、また明日……返事聞かせてくれる？」

「えっ！？ いや……その、あの……」

「それじゃあ……バイバイ……」

と希尾田くんは言つて、手を振つて、慌てて走つて帰つた。

私は頭が真っ白になって、我に帰つて、また歩き出そうとした時。

「何だ、夏実じゃん。まだ帰つてなかったのか」

「あ、ななきくん。うん……ちよつとね」

そして、私達は自然に一緒に帰っていた。なんか、気まずい。希尾  
田くんに告白された後だからかな？ いや……それと何で、ななき  
くんが関係あるの？

「夏実」

「え？ なななな何？」

「お前、俊に告られてたろ？ 良かったじゃん」

「え？ ……何で？ そうなる……の？」

「だって、お前毎回バスケ部の練習見に来てたろ。俊見るために……  
……さ……」

違うよ！ 何でそうなるの？ 私が見てたのはななきくんなのに！  
何で勘違いしてんの！？ 私をそこらへんの女子と同じ目的でバ  
スケ部の練習見に行つてたと思つてたの？ 何それ……。

「何だ、見てたのか……居るつて言つてくれれば良いのに」

思つたけど、言えなかった。言つて勇気がなかった。怖くて言えな  
かつた。今の関係が壊れるのが……。

「うーん……それだとムードぶち壊しで、空気読めよKYみたいな  
目で見られるじゃんか」

「私は気にしないし、そんな風に見ないよ」

「気にしろよ！ 告白されてんのにダメだろおーが！ ちよつとぐ  
らい自分がモテ女つて自覚しろよ！ 学年？1……いや、学校？1  
の美女！ よっ！ みんなのアイドル！ 男女問わず人気を集めて

るらしいではないか、幼馴染として鼻が高いぞ！」

「え？ 何の話してるのななきくん？ 私が、モテ女？ そんな事ある訳ないじゃない。何言ってるの」

「……ああ、そうだったわ。夏実って、鈍感だったな。オマケに人がびつくりする程ちよー天然！」

ななきくんはいつもそうだ……。からかってばかりで、きつと私の事なんか女の子として見てもらえてない。そんなのヤダ、絶対。だけど、どうすればいいのか分からない、どうやったら……女の子として見てもらえるか、分かんないよ……。

「んじゃ、おやすみ、夏実」

「あ、うん。おやすみ」

ななきくは手を振って、家の中に入って行った。私達は、家は隣同士で、昔はよく窓から飛び移ってななきくんの部屋に行ってたつもりで……って、今もか。

「ただいまー」

「お帰り、ご飯食べなさいよ」

「今日いらないから片づけて」

「え？ ちよつと夏実？」

私は、2階に上がって、自分の部屋に行った。そして、ベットに寝転んだ。

「はあ、疲れた。何か色々あって……変な感じ」

私は、いつの間にか寝てしまって、朝を迎えた。

「んーっ」

起き上がって、ベットから降りる時、ふと鏡を見て自分の格好に気づいた。

「あ、制服のまま寝ちゃったんだ……はあ、今日休みでよかったー」

ん？ そついえば、昨日……希尾田くんに告白されて、返事また明日って……。待てよ、今日は土曜で学校休みでは？

そんな時に、窓の方から声が聞こえた。

「おはよー、夏実！」

振り返ると窓には、ななきくんが居た。

「ななきくん？ あ、おはよー」

「おつ、制服着て、行く気満々じゃん！ 準備はやいな、流石夏実だ！」

「何の話？」

「え？ 聞いてたんじゃないのか？」

「何を？」

「だから、今日バスケの試合がある事……、聞いてねえの？」

「うん」

「まっいつか、とにかく、学校の体育館でやるから来いよな」

「ななきくん、試合出るの？」

「おう！ 当たり前だろ」

と言って出て行ってしまった。こんな事してる場合じゃない！ ななきくんの姿を見なくては！ 急いで準備して家を飛び出していった。そして、ななきくんの家の前に行った。そしたら、ちようどななきくんが出てきた。

「あつ、夏実。待ってたのか」

「うん」

「先行っても良いのに」

「でも、一緒に行きたいし」

「そんな言葉、俊が聞いたらショック受けるぜ」

「別に付き合ってるわけじゃないからいいの、告白されたただだよ」

「おつ、それは自慢ですか？」

「なによそれえ」

頬をふくらませて怒った素振りをした。

「あつ！ 噂をすれば、俊くんが来ましたよー。夏実」

「知らない！」

「…………おはよう……………」

大きな声を出しすぎて、希尾田くんに聞こえたらしく、少し暗い感じ。

「ああ、聞こえたよ絶対。可愛いそー俊」ボソッ

「何よー。元わと言えばななきくんのせいじゃない」コソッ

怒った口調で言ってななきくん置いて、体育館に行ってしまった。

どうしよー。ああ、どうしてあんな事しか出来ないんだろ。はあ……。

## 喧嘩と涙の理由

体育館にドリブルの音と歓声が響き渡る。そしてこっちのチームの歓声はすごい。バスケット部の人の応援より、学校の女子の応援の方がすごく盛り上がっている。

「こんなに、女子がいるとは思わなかった」　ボソッ

「ちよっとー！　夏実！　ちゃんと応援しようよおー」

何故か、紅ちゃんもいますが……。ホント何処から聞いたのやら……紅ちゃんは情報早いからなあ。

ところでななきくんはというと、めっちゃカッコイイ！　じゃなくて……えっと、只今32対16でウチが勝ってます。試合は後5分だしそろそろ勝負が決まります。（展開はやっ！）

「あ、希尾田くんまた決めた。これで何ゴールだろ？」

「え？　分かんないや」

「ずっと見てたのに。……さっきので12本だよ。確か」

「数えてないもん。でも夏実はあんまり見てないのに何で分かるの？」

「そりゃ、ゴール決めたらそっち見るよ。ほとんど希尾田くん決めて目立ってるし」

「……あ、そうだね！　私ってばホントにもー……」

“数えとけば良かった”なんて思ってるかも知れない。誤魔化しとかなきゃ。

「でも私、紅ちゃんの言う通り全然見てないから数え間違いかも。ちよっと分かんなくなっちゃった！」

全然のところ力入れて言っちゃった。

「そ、そっか。そうだね！　アハハハハ！　夏実はドジだからなあー！」

良かった元気戻ったみたい。上手に言えなかったかと一瞬思っちゃった。

「ナツツー！ 紅！ 私達の学校が勝ったよ！」

「あ、もう終わったんだ」

「え？ 本当！？ やったー！ ねえ、夏実！」

「うん！ すごい！」

「差し入れ持っていこうよ！ 二人とも」

「いいねえ。行こう！ 夏実はやく！」

「え？ あ、うん」

差し入れなんて持ってきてないけど……。まあ、いつか。ななきくと話せば。

「希尾田くん！ お疲れ様！」

紅ちゃん、積極的だなあ。でも、ななきくんは紅ちゃんのこと好きだし、希尾田くんは私を……。なんか複雑。

「やつ！」

「あつ夏実。勝ったぞー」

「知ってるよ」

「ははっ！ そりゃそうだ……」

ななきくん……。紅ちゃんの方チラチラ見てる。やっぱ、気になるんだ……。

「そりゃ、そうだよね……」ボソッ

「んー？ 夏実なんか言った？」

「あー、いや別に何でもない、何でもない！」

「あつそ……それでさあ、夏実」

ななきくんは恥ずかしそうに顔を薄い紅色あかいろに染めていった

「え？ 何、そんな顔しちゃってさ」

ドキドキしながら聞き返した。

「えつと……その、あの……だな……」

その発した言葉と同時にななきくんは私から顔をそらした。

「……………何？ 早く言つてよ。そんなんじゃ分かんない」

私はそっけなく、冷たいふりをして言い返した。

「別に、俺じゃないんだけどな。誤解するなよ？」

ななきくんは話す前から、必死に弁解をしていた。

「……うん」

「あ、秋本の事をす、好きな奴がいるんだよ。秋本ってよく見たら可愛いくて美人って男子に結構人気あって」

「うん……それで、何？ 私が紅ちゃん呼び出させてこと？」

私が言ったあと、ななきくんは視線を私の顔に戻して、また弁解を始めた。

「違うんだ。そうじゃなくて、秋本の趣味とか好きな物とか知りた  
いから夏実に頼んでって言われたんだよ」

ななきくんが息切れをしているのはきつと、試合が終わった後だからだけじゃなくて、必死に弁解しているからも入っているのだろう。きつと、息切れもするほど……そんなに知られたくないってことだ。そして、話し相手の顔から自分の顔をそらして話するのはななきくんの嘘をつく時の癖だ。

でも、途中で顔を戻したから嘘混じりのホントってことになる。

頼まれた事が本当で、紅ちゃんが男子に人気なのは少し微妙なところで、ななきくんが紅ちゃんの事を知りたいと思っ  
てないって言うのは、嘘。真正銘の嘘だ。私の感はよく当たるから間違いない。

「分かった教えてあげるよ」

「ホントか！？ あー、よかった！」

嬉しそうに微笑むななきくんは本当に嬉しそうだった。ちょっと、悔しくなってきた。紅ちゃんは私の大切な親友で、ななきくんは私の幼馴染で私の初恋、希尾田くんはちよつとした知り合いだ。

それなのに一瞬だけ、紅ちゃんが憎くなった、ななきくんが嫌いになった、希尾田くんがウザくなった。

……紅ちゃんが、ななきくんの気持ちを知らないことぐらい分かってる。でも、それを知ってて希尾田くんの所へ行ってるような気がした。

……ななきくんが私の事眼中にないことぐらい分か  
ってる。でも、ずっと見てきたのは私なのにつ  
て、言いたくなかった。

……希尾田くんが女子にモテモテなことぐらい分かってる。でも、希尾田くんがいなければ紅ちゃんはななくんの気持ちに振りむいてくれたかも知れないって、思った。

涙が溢れかえりそうになった。

「あ、秋本。どうしたんだ？」

振り返るとそこには、ほんのり頬を紅色あかいろに染めた紅ちゃんが立っていた。それはまるでななくんが頬を染めたような色になっていた。

「夏実に用事。あ、それから伊藤くんお疲れ様」

「どうも」

「何？ 紅ちゃん」

涙をグツとこらえて紅ちゃんを睨みつける感じになってしまった。

そして、思わず冷たく言い放った。

「どうしたの？ 夏実、ちよつと怖い……」

そう言うところがムカつく。物正直に言う紅ちゃんが嫌い。……まして、落ち着け紅ちゃんは何も悪くない、悪くないんだ。そう自分に言い聞かせて、心の中で繰り返した。そしてとっさに浮かんできた言葉があった。“悪いのは私”……そうよ……悪いのは………私なの？ それに対してまた浮かび上がってくる感情と言葉があった。

“紅ちゃんがムカつく、ウザい” “違う、私は悪くない”

「何が怖いよ。……っウザいんだよ！」

心がチクンと痛む。

「な、夏実？ ねえ、何かあったの？ あったなら私、相談乗るよ」

「うるさい！ アンタなんか相談なんかする訳ないじゃん！ 人の気も知らずに、希尾田くんばっか見て、ホント呑気でいいよね！」

心臓がいつも以上にドクンドクン鳴って心の中に鳴り響く。その音が心を痛めていく。

「別に私そんなこと……、夏実だって！ 私の何が分かるわけ！？」  
紅ちゃんが声を張り上げる。それと同時に私の心に鉛がズシンと落ちてきたみたいに心が重くなる。

「知る訳ないじゃん！　それどころか、知りたくもないね！」  
心がどんどん狭くなって、重くなって、痛みが重なっていく。

「何よそれ！　意味分かんない！　夏実のバカ！」

紅ちゃんの声が心に響いて、また心が痛む。

「そんなこと言って、ホント最悪でサイッター！　紅ちゃんなんて、大っ嫌い！」

言ってしまった……。一番紅ちゃんに言いたくなかったことを私は言った。

そして我に返った……私の目の前で紅ちゃんが顔を俯かせていた。私の声は体育館中に鳴り響いて、皆が私に視線を向けていた。ななきくんは呆然として驚いていた。

希尾田くんは“すっかりとした視線で真っ直ぐ”私の事を見ていた。  
「……はあ、はあ、……わたつ、私……」

私は、その場から逃げるように走って、体育館を出て校舎裏に行った。

“ホント最悪でサイッター”この言葉が心に鳴り響く。

「最悪でサイターなのは私の方じゃん……。最悪でサイター以下だよ……」

涙声で、一人で喋って壁によりながら、縮こまってしゃがみ込む。  
「海辺？」

男の子の声がした。その声は透き通ったような、よく通る声だった。振り向くと、そこには希尾田くんがいた。

「あ、良かった。ここに居た」

につこり微笑んで、優しく言った。

「希尾田くん……何でここって分かったの？」

「だって、海辺何かあるといつもここに来るから」

やっぱり、希尾田くんは微笑んだままで言ってきた。

「……希尾田くん……」

希尾田くんはしゃがんで私と目を合わせて言ってきた。

「言っただじゃん。俺、海辺が好きだって……ずっと見てたんだ。ず

つと、ずっと……」

少し頬を赤く染めながら、希尾田くんは私をなだめるようにゆつくり少しづつ言った。

「……希尾田くんは、私の何処がいいの？ 何処を好きになったの？」

私は、顔を埋めながら言った。

「全部だよ。俺は……海辺がどんな事をやろうと、誰を好きでも、別にどうだっていい。ただ、俺はずっと、海辺の事想い続けるだけだから」

優しい笑みを浮かべて、希尾田くんは言った。とても温かくて優しい気持ちになれた気がした。

それと同時に、私の頬に一筋の雫が流れた。

「……うわああああん、わああああん、うっ、ああああ、あああああ……」

希尾田くんは、私が泣き止むまで何もせずにとずっと、そばに居てくれました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9547m/>

---

青夏

2010年11月12日20時18分発行